

こらっせ便り

2022年6月28日

【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008、 eメール : info@korasse-kanagawa.org

Web サイト : <http://korasse-kanagawa.org/>



今年も裏磐梯でリフレッシュプログラム

「こらっせ」事務局長 遠野はるひ

新型コロナウイルス感染拡大で、2020年3月からの2年間、「こらっせ」は従来の「リフレッシュプログラム」や「檜葉児童館応援」も中止しなければなりませんでしたが、しかし、コロナ禍の中でもできることに取り組み、同時にポストコロナの方向性について話し合いを深めてきました。そしてコロナ状況が少し落ち着きはじめたので、3月20-21日には「福島スタディーツアー」、4月3日には「キックオフ・ミーティング」、そして、6月4-5日には、新「こらっせユース」を対象に山北での研修を行いました。

8月のリフレッシュプログラムは、檜葉っ子を招待し山北で実施する予定でしたが、関係者と相談した結果、今年も中止することにしました。理由は①子どもを含む感染者数の高止まりが続いている、②プログラムでは大学生と子どもが密になる、③子どもだけを県境を越えて神奈川に行かせることには保護者の不安も大きい—などのためです。

では、どうするかと思案していたところ、福島市の友人から子ども施設の子どもたちと母子施設の母子を裏磐梯湖畔のキャンプ場で遊んでもらう1日イベントを企画したらというアドバイスがありました。子どもだけの子ども施設と母親と一緒に母子施設の子どもとは同じイベントに参加するのは難しい、密にならないように人数も10数人に限ったほうがいいという理由で、8月10日と8月18日に2回に分けてリフレッシュプログラムとして実施することにしました。コロナ禍が沈静化すれば、来年は従来のプログラムを再開します。

「檜葉児童館応援」のプログラムはコロナ状況がひどくならなければ1泊2日で実施します。これまでプログラムは応援だけでしたが、今年度からは福島での「学び」を組み込み「福島応援・スタディーツアー」にしたいと考えています。

みなさま、引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

福島スタディーツアー報告

「震災はまだ終わっていない」を痛感

3月20日、21日の両日、「福島スタディーツアー」を行いました。参加者はこらっせユース（学生）と元ユース、横山満里奈事務局次長の5人です。福島で活動している吉野裕之さんに案内していただきました。参加者の感想を抜粋してお伝えします。

忘れてはいけない

東日本大震災はまだ終わっていないということを改めて実感しました。震災の影響を受けた海岸はほとんどの場所がれきの撤去が済み、新しい道路が整備されて全体的には新しい綺麗な街という印象を受けました。一方で帰還困難区域内は、11年間の時が止まったままの建物がたくさん残っていることを目の当たりにしました。窓ガラスが散乱し、天井が崩れ落ち、動物に荒らされた建物が立ち並ぶ姿は、非常に痛ましいものでした。



関東に住む私たちにとって、日常生活において震災を意識する場面はそう多くないと思います。しかし、まだ故郷を奪われ、帰ることすら許されていない方がたくさんいます。今も大変な思いをされている方がいることを忘れずに暮らすことが、私たちができることなのではないかと思っています。

利便性高まった「ここなら笑店街」

スタディーツアー1日目の前半は楡葉町を訪問しました。私（佐藤聡）は生まれも育ちも楡葉町でありながらも、震災前と後では地元がどのように変化してきたかを詳細に知りませんでした。そのため、今回のスタディーツアーで、楡葉町を訪問することに興味を惹かれました。

天神岬では震災後に新設された「みるーる天神」という展望デッキを見学しました。展望台からは津波被害の大きかった地区が眼下に広がっていました。海の近くにはほとんど家が建っておらず、閑散とした印象でした。また、震災当時の津波の様子を撮った写真が展示され、改めて津波の恐ろしさを実感しました。

「ここなら笑店街」は、東日本大震災からの復興のシンボルとした楡葉町の商業施設です。もともとは役場前に仮設店舗として営業されていました。その後、国道6号線沿いの敷地に移転・リニューアルオープンし、現在ではスーパーや飲食店、ホームセンターなど計10店舗が入居しています。地元民としては1か所に集約されたため、より利便性が高まったように思えます。

被災者の前向きな生き方に感動

1日目の午後、檜葉町保健福祉会館にて語り部の高原カネ子さんのお話を伺いました。高原さんは、震災当時神奈川県で避難生活を送り、その後檜葉町に戻って復興に向けた取り組みを進めていらっしゃる方です。



原発事故で避難中にホテルの宿泊を断られたこと、お孫さんが学校でいじめに遭ったこと、震災前指導していた太鼓教室の子どもたちの行方が分からないことにも気づかないほどで、自分たちの生活のことでいっぱいだったこと。高原さんのお話はどれも胸に刺さることばかりで、言葉が出ませんでした。しかし高原さんは、「今振り返ると、避難生活を通して成長することができた」ともおっしゃっていました。震災によりできなかった太鼓教室の発表会を、多くの人の支援

により東京で実現できたこと、そこから人のつながりが広がっていき今の活動にもつながっていくこと。過去を前向きに捉えることができるようになるのは、簡単なことではなかったと思います。

東日本大震災・原子力災害伝承館を訪問

3.11 発生前の双葉町では、原発は安全で有効活用されていると周知されていました。『東日本大震災・原子力災害伝承館』の館内を進むと、原発事故直後の対応、災害の影響を伝える展示等がありました。福島第一原子力発電所のミニチュア模型の展示では、スタッフの方が口頭説明をして下さいました。事故を防いだかもしれないポイントが重複していたと聞き、文書を読むよりも理解が深まりました。

「小さな声」聞くことを学ぶ

2日目の午後、子ども食堂よしいだキッチンを運営する、江藤大裕さんにお話をお伺いしました。江藤さんは、子ども食堂は「子どもの居場所」で、絶対になくしてはいけないものであるといいます。子ども食堂にやってくる子どもや親には、様々な背景があります。自分の気持ちにフタをして本当にやりたいことが見えなくなっている子どもも少なくありません。江藤さんは、子どもたちを支え、子どもの異変により早く気づくことを大切にしているそうです。日常に寄り添うことで社会に溢れている世間に届かない「小さな声」を聞くことが大切だと教えていただきました。

私（青木愛美）は4月に小学校教諭になります。江藤さんからは、教員も地域との関わりを持ち、子どもたちの笑顔を守るためにお互い協力し合うことが大切であると教えていただきました。地域から信頼されるような教員となれるように、できることを見つけていきたいと思います。

2年ぶりにキックオフ・ミーティング（講師：鴨下さん一家） 「フクシマを忘れない」を再確認

4月3日、2022年度プログラムのキックオフ・ミーティングをオンラインで開催しました。コロナ禍で夏のリフレッシュプログラムの中止が続いたため、キックオフ・ミーティングも開けないままでしたが、ようやく2年ぶりに開催することができました。

今回のタイトルは「原発事故から11年、自主避難家族の思うこと一聞いて、カルガモ一家の物語を一」と設定し、原発事故から自主避難して現在は東京電力と国に対し、被害を訴え責任を追及する裁判「福島原発被害東京訴訟」に

取り組んでいるカルガモ一家の4人から、鴨下祐也さん、美和さん、全生さんに登場していただきました。コーディネーターは、11月のオンライン講演会でお話いただいた加藤彰彦さんをお願いしました。2011年3月の東日本大震災、原発事故から11年が過ぎ、世の中の関心が薄れつつあるなか、「フクシマを忘れない」という私たちの思いを再確認するための企画でした。

当日は80名という多くの参加があり、たいへん充実した2時間をもつことができ、たくさんの感想や質問が寄せられました。講演の録画はこらっせのブログ、「22/4/3 オンライン講演会のご報告」で見ることができます。

こらっせブログ QRコード



コロナ禍でのオンライン開催

最初に、カルガモ一家のお父さん、鴨下祐也さんから放射線被ばくの問題を中心にしたお話がありました。祐也さんは福島高専の教員として、建物の屋上で野菜の水耕栽培をするプロジェクトに取り組み、実用化目前になっていましたが、原発事故により断念せざるをえなくなりました。チェルノブイリ事故の恐ろしさを知る科学者であったため、地震の直後に避難を決断し、一家で車を使って神奈川まで移ってきました。その後、学校が再開になったため、家族と別れて単身でいわき市に戻りました。学校再開には反対でしたが、教員の間で被ばくの危険性についての理解がなく、孤立してしまい、結局退職することになったそうです。

お話で強調されたのは、放射能汚染の測定がいい加減であり、精度の低い測定によって食品の汚染が容認されていることでした。特に化学肥料を使わない循環型農業の農産物は危険なのに、汚染がないと伝えられている問題が指摘されました。また、放射線の健康被害は科学的に解明されているにも関わらず、「子ども被災者支援法」では「(放射線の)危険について科学的に十分に解明されていない」と書かれてしまっている。これは間違いであり、問題がある、とも指摘されました。ま

た、放射線の健康被害は科学的に解明されているにも関わらず、「子ども被災者支援法」では「(放射線の) 危険について科学的に十分に解明されていない」と書かれてしまっている。これは間違いであり、問題がある、とも指摘されました。

ローマ教皇にも訴え



次に、長男の全生さんが「福島から東京へ—19歳が問う原発事故」というテーマでお話をされました。事故当時、全生さんは8歳で避難生活を余儀なくされ、転校した東京の学校ではいじめにあい、「自主避難」のため住居が安定しないなど、辛い経験が語られました。16歳のとき、原発事故の問題を訴える手紙をローマ教皇に出したところ、返事が寄せられ、それをきっかけにヴァチカンで教皇に謁見する機会を得て、合わせてフランス、ドイツ等を訪問してヨーロッパの環境教育にふれたそうです。その後ローマ教皇が来日した際に開かれた集まりでス

ピーチしたことは、社会の関心を集めました。

全生さんはヨーロッパと比べて日本では原発問題への議論が足りない、情報が不足していることは問題だとして、裁判に取り組むなど、被災の実態を訴え続けています。

三人目に登場したお母さん、美和さんからは、事故直後の避難の生々しい状況、母子避難の苦勞、内部被ばくから子どもを守ることの重要性などが語られました。避難せずに現地に残った知り合いとの電話で、家族の事情で避難したくてもできない苦しみを伝えられたこと、避難してきた家族も子どもが大きなストレスをかかえていたことなど、当事者でなければわからない貴重なお話をうかがうことができました。

辛かったこと、言いたいこと

加藤さんからは3人に対して、一番辛かったことは何か、という質問が出されました。祐也さんは、放射能汚染の実態、被ばくの危険が理解されず、危険だというのは勉強不足のせいであって実際は安全なのだ、などと一方的に非難されることが辛かったそうです。全生さんは、学校でのいじめ、事故の深刻さが世間に伝わっていないこと、先の見通しが立たない避難生活が辛かったと語りました。美和さんからは、家族と一緒に生活できない時期があったこと、被害もないのに勝手に逃げたと中傷されたこと、復興が正義であって、それに水を差す言動は排斥されることが辛いといわれました。

最後にまとめとして言いたいことは何かと問われ、祐也さんは関東でも今なお汚染が続いていると認識してほしいこと、全生さんはともかく裁判に注目して傍聴に来てほしいことを訴えていました。また美和さんからは、ストレスをかかえていた次男がこらっせのリフレッシュプログラムに参加して楽しい時を過ごせたことにたいへん感謝しているとの言葉がありました。(まとめ 事務局)



毎年リフレッシュプログラムを行ってきた山北町を、6月4日と5日に訪れました。参加者はこらっせユース11人、社会人3人、スタッフ5人です。

1日目は、共和地区で関口康弘さん(足柄の歴史再発見クラブ)、富田陽子さん(林業家・山北町議)のお話の後、富田さんの山に入り間伐作業を行いました。落合館で宿泊し、2日目はサイクリングとポートコース、SUPコース、ハイキングコースに分かれアクティビティを行いました。最後は、三保ダムと洒水の滝を見学しました。山北ブログをご覧ください。

【共和のもり】は小学校を改装しており木で囲まれた場所です。天井、床、テーブルまで全て木です。部屋に入るとほんのり木の匂いを感じました。お昼に頂いた金柑と梅ジュースは、この地域で採れたものだそうです。これからは季節や自然を感じながら食事をしたいと思います。



山北町の【酒匂川(さかわがわ)】は、昔は何本にも分かれていました。川の流れをコントロールするために堤防が作られたのは今から約300年前、江戸時代のことです。酒匂川と周辺地域は数多くの水害に見舞われてきました。そのような災害から人命や家屋を守るために、三角土手や霞堤など、様々な工夫がなされてきたそうです。

間伐の時に木に一周切り込みを入れてから【竹ヘラ】で木の皮を持ち上げてそこから剥いていきます。ナイフで竹の先端を削っていく作業は力が必要でした。どうしたら綺麗に削れるか、どのように力を入れたら良いのか考えながら削るのはとても楽しかったです。



【皮むき間伐】は木が立ったままの状態です。樹皮をむき、立ち枯れをさせてから伐り倒す方法です。樹皮をむいた後に木を触ってみるととても湿っていました。これは根から吸っていた水分です。ヒルがいてびっくりしましたが、皮むき間伐の経験はいい思い出になりました。帰りは川の水を飲みました。新鮮な水はとても美味しかったです！

温かな【三保弁】を開けると、最初に目に入るのは3分の2を占める大きなヤマメ。他にも、から揚げやきんぴらごぼう、芋の煮ころがし等がぎっしりと詰められている。ヤマメは、頭や背骨まで丸ごと食べられるほど柔らかく、甘辛く煮られていた。味や食感、素材と三保の様々な魅力がたくさん詰まったお弁当だった。



【洒水の滝】の遊歩道は完全に森の中という感じで、静かな雰囲気です。深呼吸すると木の香りがして、耳を澄ますと川の水が流れる音が聞こえます。滝周辺には展望台もあり近くから見ると迫力があって美しい滝でした。

山北町で最初に目に入るのが【丹沢湖】で、三保ダムの建設によってできた人造湖だそうです。丹沢湖を囲む森林の景色はとても壮大で、マスクを外したくなるような澄んだ空気も山北町の魅力です。自然に溢れた山北町で過ごすことで、日々の疲れをリフレッシュすることができました。



登山は初めての経験で、正直標高も低い山だと油断していたのですが、いざ【大野山】に登ってみると結構しんどかったです。道は整備されていて、頂上までの時間を示す立札があったのは、ありがたいと感じました。頂上でマシュマロとチョコをクッキーで挟んだ菓子を食べて美味しかったです。頂上からの景色は素晴らしく、山々が一望できて最高でした。

【サイクリング】は自然の豊かさを存分に楽しむことができます。コース途中の展望台は、緑に覆われているので少しひんやりとしていて、空気もとっても気持ちがいいです。

【ボート】に乗ることが初めてだったので、水に浮かぶ瞬間はすごくドキドキしました。「立ち上がると転覆する」と教わり、腰を低くしたまま慎重に交代、なかなか緊張しました。涼しい風を浴び、景色がゆっくり流れるのを見て、気持ちがよかったです。



【SUP】とは『スタンドアップパドルボード』の略です！ボードの上に立ち、パドルを左右に漕いで水面を進んでいく新感覚のウォータースポーツです。今回は、And LIF(アンドリフ)のインストラクターさんが2人ついてくださいました。体験前は、ボードの上うまく立てるか不安でしたが、実際やってみると簡単に立ち上がることが出来ました。

小児甲状腺がんの患者の裁判が始まりました

福島原発事故以前における子ども甲状腺がんの発症の例は、福島では皆無であったと聞いています。

ところが、災害当時 18 歳以下であった小児から、いまや少なくとも、301 名もの甲状腺がんが見つっています。福島県検討委員会は「過剰診断による、「甲状腺がんもどき」を見つけただけ」と因果関係を認めようとしません。

それどころか、海外に訴えようとした患者の声を、岸田総理大臣や内堀福島県知事は圧力をかけてやめ

させようとさえしました。しかし、甲状腺がんの摘出手術を受けた人達の中で手術が不要だった患者はいないのです。甲状腺の半分を摘出したり、再発して残りの部分も切除したり、肺に転移したり、更に過酷な放射線治療を受けた人もいます。それでも快癒しているわけではありません。

これまで差別や偏見を恐れて声を上げなかった 6 名の患者が、因果関係を明らかにすべく裁判に立ち上がりました。事故当時 6 歳～16 歳の男女です。



5月26日に東京地裁で第1回裁判

5月26日、東京地裁において第一回目の「311子ども甲状腺がん裁判」が開かれました。27席の傍聴席に対して250人近くの人々が支援に詰めかけました。法廷に入れなかった参加者のために、甲状腺がんの患者である若い女性の訴えが音声で流されました。一部抜粋してご紹介します。

・・・『甲状腺がんは、県民健康調査で見つかりました。辛い穿刺吸引細胞診を受けた結果、がんと判明し手術しなければ23歳までしか生きられないと言われ、苦しい手術を受けました。そののち地元の大学に入学しましたが、再発が判明し肺へも転移したため、再度手術を受けました。リンパ節への転移が多かったので、手術も長引き傷も大きくなり、人から、自殺未遂でもしたのかと言われました。大学もやめました。そして、肺転移したため病巣を治療する「アイソトープ治療」が始まりました。これは高濃度の放射性ヨウ素を自ら飲み、がん細胞を内部被曝させることにより治療をするもの。自分自身が被曝の汚染源となるため医師も看護師も近寄れず、鉛で隔離された病室でたった一人で治療に向き合いました。食欲もなく吐き気も強く、そのために眼圧がかかり過ぎて、片方の目の血管が切れてしまい真っ赤になりました。天井近くには「放射能測定装置」が設置されていましたが、私が近づくと数値がすごく上がりました。あまりにも過酷な治療でしたが、うまくいかず効果が出ていません。腫瘍マーカーも毎回上がってきています。もうこれ以上自分のせいで家族に辛い思いをさせたくありません』・・・

これを法廷で聞いた東電側の代理人は、それまで「原告の声を聞く必要はない」と頑なだったのが、このむごい治療に胸を打たれたようで、「原告の意見を聞くのは、これから裁判官に任せます」と変更をしたそうです。次回は9月7日(水)14時の予定です。(事務局スタッフ 錦織順子)